

## 漢字文化が日中を繋ぐ

会社経営者 塚越 誠



寧波の梁祝文化園では巖總經理（巖社長）から依頼され、「愛情聖地 梁祝園」を揮毫。早速ネット新聞に掲載されました

い。実は下のフロアで私が「書」を書くための準備をしていました。筆、墨、画仙紙が整然と並べられていました。私は一瞬戸惑いましたが「中国語が出来ない私にはこれに従うしかない！」と。先ずは「馬到成功」を指示され書き始めると、あちこちから「おー」という声援が。

「麗人君愛」、「海韵飄逸」、「春和景明」などなど何枚書いたらでしょうか？ただし即興で書いた仕上がりを見るとイマイチ（今一つ）ですが、その時はもう肝が据わって書きまくっていました。お酒の酔いも醒めたけど、「書」は中国の皆さんとても喜んでくださるから嬉しい。これぞ「漢字文化が日中を繋ぐ」を実感しました！

翌朝は、昨晩ホテルに到着し友好を交わした中国、韓国の客人たちと大型バスに乗り込み「国際会展中心」へ（日本で言えば国際展示場）。開会式です、日本からは奈良の太鼓チームが出演するなど盛大な催しでした。この寧波は中国四大愛情故事の一つ「梁祝愛情伝説」のゆかりの地といわれ、この十年で広大な敷地に「梁祝公園」を増築、「梁祝博物館」も造られたのです。その中に我々「日本・梁祝会」の活動が全て展示され、私が過去に揮毫した題字「梁祝会」もありました！

二〇一六年は中国・寧波が東アジア文化都市の拠点となる年、同時に日本では「奈良」、韓国は「濟州」が選ばれました。寧波はご存じ遣隋使、遣唐使はじめ中国と日本をつなぐ最も重要な港でした。弘法大師・空海が書聖・王羲之を学び、日本書道に与えた影響は二世紀の今でも計り知れません。

一方、我ら「梁祝会（日本梁祝文化研究所）」の渡辺明次会長（以下渡辺先生）は、中国人なら誰でも知っている愛情伝説「梁山伯と祝英台」を上梓、書籍をもつて日本に伝えた最初の人です。この度、寧波政府の招待を受けて「東アジア文化の都・二〇一六寧波」開幕式およびシンポジウムに参加することになりました。きっかけは、開催地の寧波が「梁祝愛情伝説」の発祥地であるという研究結果により招待されるべく客人となつたわけです。

この度の寧波イベントには、私のほかに鎌倉での戯曲

「梁祝」でヒロイン祝英台を演じた青井聰子、北京駐在時代からずっと協力をされてきた正谷絵美が随行しました。さて開幕式の前日、渡辺先生と私は早朝七時二十分に羽田を出発し、一足先に寧波空港に到着。何と「中国梁祝文化研究会」の周静書会長が直接お出迎えくださり、車でホテル（寧波海逸大酒店）へ。個別にルームでくつろいだ後、ゲストルームに案内され事務局の女性と四人だけの夕食でした。中国語を話せない私はただひたすら飲んで食べて。渡辺先生は会話はできるが長時間は苦痛な様子……。そこで私は、緊張をほぐすために揮毫して来た一幅（シンポジウムで使う碑文の一節）をこの場で車でホテル（寧波海逸大酒店）へ。個別にルームでくつろいだ後、ゲストルームに案内され事務局の女性と四人だけの夕食でした。中国語を話せない私はただひたすら飲んで食べて。渡辺先生は会話はできるが長時間は苦痛な様子……。そこで私は、緊張をほぐすために揮毫して来た一幅（シンポジウムで使う碑文の一節）をこの場で披露しました。

実はそれが喜ばれたようで、予期せぬことが起こったのです。

ふと気がつくと、同席していた事務局の女性が見えな

私は六十二歳の任期満了で多くの皆様から御支援をいただいた前橋市議会議員を退職し、北京外国语大学に二〇〇五年留学（本科四年）しました。目的は、中国語を学び、中国の文化や歴史、中国の人々の心に直接触れ、日中友好活動を進めたいと思っていました。これは、日中國交正常化提言（一九六八年九月八日）を行った池田大作創価学会会長（当時）の講演を直接会場で聞くことができたことと、第一回公明党青年訪中団（一九七七年九月、五百名）随行記者としての体験が大きな要因となっています。

中国人学生と交流する中、中国の大学で日本語教



## 文化大恩の国と永遠の友好を

元前橋市市議会議員 浦野 紘一

師を勤め、日中友好活動を深めてまいりたいと決意しました。大学修了後、日本にいたん帰国し、日本語教師の資格を取りました。二年後の二〇一二年、素晴らしいことに関係者の御尽力で、私が心から尊敬する周恩来総理の故郷（江蘇省淮安市）の総合大学、淮陰師範学院に招聘されました。この感動は筆舌に尽くしがたいものでした。ちなみに、北京外国语大学の私の卒業論文は、「周恩来総理と日中友好」でした。淮陰師範学院は正門を入ると、「中華の興隆のために学ぼう」との周恩来総理の筆による大きな石碑が横たわり、校内の所どころに周総理のスローガンが掲げられています。また、周恩来研究所が

そして、ここでもまた「書」を頼れます。事務所の大部屋に案内され、「春華秋実」、「真水元香」など昨日と同様にメモを渡され、その場の勢いで書きまくりました。でも皆さん本当に喜んでくれるから疲れません。ところで、梁祝文化園の巖社長さんに頼まれて書いた「愛情聖地梁祝園」が、早速ネット新聞に掲載されたと知らされたのには驚きました。  
すっかりメインストのようになってしましましたが、私はあくまで渡辺先生のお供。明日は本番のイベント「中日韓・梁祝文化シンポジウム」が待っています。  
という訳で、一連の行事に参加し無事帰国しましたが、寧波空港でお別れの際、「中国梁祝文化研究会」の周静書会長からメモを渡され、日本梁祝文化研究所・贈として「梁祝会」の揮毫を頼まれました。つまり帰国後も「書」を交えた友好は続くのです。  
しかし中国側の書法家もこのまま黙っているはずはない（笑）、翌年には上虞市英台文化研究会の陳秋強会長の息子さんとお孫さんが来日され、隸書で書かれた陳会長の双幅をお持ちになりました。また、上虞の万国通先生（梁祝伝説研究者）からは自筆の書三種類を梁祝会員に個別に贈られたのです。

（書歴）雅号・塙越夢義（Tsukagoshi Bouzi）。石橋翠水主宰・日本書道教育学会および中国・西泠印社名譽理事・梅舒適の門下丸山大碩に師事。二〇〇一年、日本書道会・理事長。二〇〇二年、産経国際書会・評議員・審査会員。二〇〇四年、日本書道会および産経国際書会を退会。二〇〇八年六月、「日中文化交流の会」結成、日本側代表。二〇〇九年三月、「練馬区書道連盟」理事。



塙越誠（つかごしまこと）

一九四八年六月生まれ、東京都在住。一九九二年、広告企画制作会社（有）ネクストアドプランニング設立。港区赤坂四丁目に事務所を構える。二〇〇七年十二月、本社を赤坂から神田に移転。二〇一〇年十二月、本社を台東区に移転。現在に至る。

さらに一年後、上虞市英台文化研究会の陳秋強会長から私宛に、「中日文化使者」を揮毫して欲しいと。この「書」は現在、梁祝文化展示室に永久展示されていますが、大変光榮なことばかりの展開には喜びと共に漢字を愛する皆様に感謝しています。  
中国語を話せない私でも漢字を通して文化交流の一端を担えたわけで、振り返ると中国人の「書」に対する崇高な思いには頭が下がりました。日本人も改めて漢字文化を尊ぶべきと感じました。

学内にあり、教師と学生の独自の周恩来研究会が活動に開催され、その研究実績は高い評価を受けています。市内には、周総理を敬愛する市民の心情が至る所に見られます。また、広大な周恩来記念館や周恩来総理の生家があり、中国各地から訪問客が訪れ、平日にもかかわらず大いに賑わい、中国の人々が、いつまでも周総理を慕い、誇りに思っていることがよく理解できます。

私も時々、大学の図書館や併設された周恩来研究所で学習しました。図書館には日本で出版された図書が少なく、蔵書を見ると発刊年数が古いものが目立ちました。タイミングよく、日本の日本僑報社が「中国人の日本語作文コンクール」の原稿を募集し、受賞学生には日本招待や表彰、指導教師（大学）に対する提出原稿数によって、上位各大学に日本語の優良図書三十～十万円分を、園丁賞として贈呈することが報道されていました。「学生の日本語能力向上」と「大学への優良日本語図書の贈呈」というチャンスが訪れました。しかし、相手は全中国の各

入賞者受賞と園丁賞の受賞がありました。待望の日本語の優良図書三十万円分が、主催者の日本僑報社から贈呈され、感動を新たにし合い、大学の図書館に寄贈することが実現しました。

ところで、淮安市は周恩来総理の故郷ですが、晩年の周総理がまさに命がけで、日本では松村謙三、高崎達之助、浅沼稲次郎、池田大作などの各氏が命を削って出来上がった一九七二年の「日中共同声明」、一九七八年の「日中平和友好条約」には、日本も中国も「アジア・太平洋地域において霸権を求めるべきではない」「武力又は武力による威嚇に訴えない」と明確に条文に記されています。ところが現在は、周総理をはじめ多くの心ある中国人と日本の先駆者の命を懸けた戦いの結晶が、打ち砕かれようとしています。現在の状況を見ると、日中両国の関係は尖閣問題などで最悪の状態となり、各紙の世論調査にも、それを裏付ける結果が出ています。誰の目にも霸権の勢いが拡大され、軍備増強が行われています。我々日本人は、日本が中国を侵略し、中

大学であるため、至難の闘いであることを自覚しました。この賞を獲得するには、私一人では何もできません。学生の理解と意欲的な取り組み、さらに中國人の日本語教師と日本人の日本語教師の積極的な協力が不可欠でした。日本語の各教師と協議を重ね、具体的な戦略を練り上げました。学生にも趣旨を納得いくまで説明し、理解を深めてもらいました。全員で力を合わせ、「日本語能力を向上させよう!」「図書館に最新の日本語の優良図書を置こう!」と目標を定めました。

結果は園丁賞で、二〇一四年、中国全国第一位となりました。学生の入賞者は二等一名、三等一名、佳作二名が受賞することができました。学生と教師が一体となって、見事に勝ち取った立派な成果であり、全員で大いに喜び合いました。さらに、江蘇省の淮安テレビは、関係した詳細な報道をゴーレムタイムを使って三回も再放送し、江蘇省教育部からは、国際貢献賞を受賞することができました。その後、北京の日本大使館で表彰式が盛大に開催され、

国国民に莫大な損害と災難をもたらしたという正しい歴史認識と深い反省の上に立たねばなりません。そのうえで、今こそアジアの平和、世界平和の原点である「日中共同声明」「日中平和友好条約」の条文を、中国と日本の両国は確實に実践する時であります。周恩来総理は、かつて「中日両国が相争えばアジアは乱れ、両国が協力すればアジアは安寧となる」と訴えています。中国は、私たち日本人にとって、まさに文化大恩の国であります。今後、日本と中国は、崩れることのない永遠の友好を築き上げ、アジアの平和、世界の平和の実現に向けて協議を重ね、力を合わせて貢献すべきであると考えます。